

## 「パン種に気をつけなさい」

ルカの福音書 12:1~9

### はじめに

私は現在、このルカの福音書を初めから順番に読み解いていくという講解説教の形式でメッセージをしていますので、基本的に今日取り扱う聖書箇所を自分で選ぶということができないのですが、今晚からイスラエルの「種なしパンの祭り」にちなんだセレブレイト・マツオートが始まりますが、まるでタイミングを計ったかのように今日の箇所は「パン種」に関するイエシュアのたとえ、メッセージとなっています。本当に「神のなさることは、すべて時にかなって美しい（伝 3:11）」という御言葉のようです。それでは今日も聖書に秘められた「神の国の奥義」に目をとめてまいりましょう。聖霊の助けがありますように。

### 1. 偽善

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:1 そうしているうちに、数えきれないほどの群衆が集まって来て、足を踏み合うほどになった。イエスはまず弟子たちに話し始められた。「パリサイ人のパン種、すなわち偽善には気をつけなさい。」

「そうしているうちに」とありますが、それは前回取り上げた箇所の最後の描写である、律法学者、パリサイ人たちがイエシュアを質問攻めにしているうちに、ということです。そこに大勢の群衆が集まって来ました。つまりパリサイ人たちと群衆が混ざり合う形になったわけですが、その「数えきれないほどの群衆」に紛れて、パリサイ人たちの姿は隠れて見えなくなったようです。それはあたかもパン生地の中にパン種が入るような状態であるとして、「パリサイ人のパン種、すなわち偽善には気をつけなさい」とイエシュアは言われました。この「パン種」のことをヘブル語でセオール(כֶּאֱוֶל)と言いますが、その初出箇所は以下のものです。

出エジプト記【新改訳 2017】

12:15 七日間、種なしパンを食べなければならない。その最初の日に、あなたがたの家からパン種を取り除かなければならない。最初の日から七日目までの間に、種入りのパンを食べる者は、みなイスラエルから断ち切られるからである。

12:16 また最初の日に聖なる会合を開き、七日目にも聖なる会合を開く。この期間中は、いかなる仕事もしてはならない。ただし、皆が食べる必要のあるものだけは作ることができる。

12:17 あなたがたは種なしパンの祭りを守りなさい。それは、まさにこの日に、わたしがあなたがたの軍団をエジプトの地から導き出したからである。あなたがたは永遠の掟として代々にわたって、この日を守らなければならない。

イスラエルの三大例祭の一つである「種なしパンの祭り」についての「永遠の掟」、ここに聖書で最初のセオールがあります。この「パン種」セオールは旧約聖書で 5 回（出 12:15、19、13:7、レビ 2:11、申 16:4）使われていますが、いずれも上記のように「取り除かなければならない」もの、あってはならないもの、「イスラエルから断ち切られる」べきものとして扱われています。イエシュアはこのたとえを弟子たちに語られましたが、即座にこれを解き明かされ、この「パン種」とは「偽善」のことであると教えられました。これをヘブル語でハーネーフ(חֶמֶץ)と言い、本来は「汚す」という意味の言葉です。初出箇所を見てみましょう。

#### 民数記【新改訳 2017】

35:33 あなたがたは、自分たちのいる土地を汚してはならない。血は土地を汚すからである。土地にとって、そこで流された血は、その血を流した者の血以外によって宥められることはない。

35:34 あなたがたは、自分たちの住む土地、わたし自身がそのただ中に宿る土地を汚してはならない。主であるわたしが、イスラエルの子らのただ中に宿るからである。

これは殺人に関する掟の一つです。このように、ハーネーフとは本来、殺人によって「土地を汚す」ことを意味し、これを「取り除かなければならない」とイエシュアは言っておられるのです。そしてその実現、成就、完成は、上記にあるように「わたし自身がそのただ中に宿る」ことによって、「主であるわたしが、イスラエルの子らのただ中に宿るから」それは起こる、成し遂げられるとイエシュアは言っておられるのです。

ちなみに「数えきれないほどの群衆が集まって来て、足を踏み合うほどになった」という状況説明が初めになされていましたが、ここで「足を踏み合うほどになった」という箇所に使われているラーハツ(לָחַץ)は本来、「虐げる」という意味で、

#### 出エジプト記【新改訳 2017】

3:9 今、見よ、イスラエルの子らの叫びはわたしに届いた。わたしはまた、エジプト人が彼らを虐げている有様を見た。

という、イスラエルの民がエジプトのような自分たちの土地ではない異邦の地で受ける「虐げ」、奴隷の苦しみを指し示す言葉で、そのようなイスラエルに敵対、攻撃、迫害する国々のイスラエルに対するその「虐げ」また彼らのハーネーフ「土地を汚す」ことを止めさせ、すべての敵をまさに「パン種」を全く取り除くように完全に排除し、「主であるわたしが、イスラエルの子らのただ中に宿る」とイエシュアは教えられているのです。つまり「パリサイ人のパン種、すなわち偽善には気をつけなさい」とは一見、自分でよく見て注意しなさい、自分の身は自分で守りなさいと言っているように思われますが、ここにも神のご計画、神の国の奥義があり、それはこのように、イスラエルの主であられるイエシュアがイスラエルの敵を取り除く、打ち滅ぼすこと、そしてイスラエルの民の中に住まわれること、すなわち終わりの日にイスラエルを根絶やしにしようとする黙示録の獣、反キリストとその勢力を打ち破り、これを後述する「ゲヘナに投げ込む権威」を行使し、イスラエルの民を救い、その国家を再興するために来られるイエシュアの地上再臨の成就が指し示されており、それによってイスラエルはまさに「数えきれないほどの群衆」とな

るといことが、そのような神のご計画の「型」がここには表されているのです。そしてさらにイエシュアのたとえは続きます。

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:2 おおわれているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずにすむものはありません。  
12:3 ですから、あなたがたが暗闇で言ったことが、みな明るみで聞かれ、奥の部屋で耳にささやいたことが、屋上で言い広められるのです。

これらのたとえも同様で、先の内容を強調、補足するものとなっています。「おおわれている」という意味のカーサー(קָסָר)は本来、ノアの箱舟の大洪水の場面で使われ、高い山々が水でおおわれ、地の上のすべてのものが死に絶えるという意味の言葉です(創 7:19)。このように、イスラエルの敵すなわちイスラエルの神の敵は、地上のどんなに高い地位、どんなに大きな権力であろうともすべて滅ぼされます。これら神のご計画は一つとして「現されないものはなく」すべて必ず成就します。ちなみにパリサイ人(פְּרִישִׁי)という名はパーラシュ(פָּרַשׁ)「明らかにする」者という意味です。しかし彼らではなく、神であられる主イエシュアこそが全ての御言葉をパーラシュ、明らかにし、目に見える形で成就、現わされる、真のパリサイ人なのです。

そして「隠されている」という意味のサータム(סָתַם)は、アブラハムの掘った井戸がペリシテ人すなわち異邦人によって土で「ふさいで」埋められてしまったことを意味する言葉です(創 26:15)。人はそこに井戸つまり水がなければ住むことができません。つまりこの事実はアブラハムの一族が住む場所、土地を追出されることを意味します。事実、彼の子孫イスラエルの民はその歴史において、次々と住む場所を追われる、国土を失った流浪の民となりました。しかしそのようなイスラエルが誰にも「知られずに」終わってしまう、滅び去ってしまうということは決してありません。むしろ彼らは永遠の昔から彼らの神、主に選ばれ、知られており、たとえ彼らがこの主に背こうとも、主は決して彼らを見捨てたままでは終わらず、必ず再び主に立ち返らせるという事実が、神のご計画がこの「隠されているもので知られずにすむものはありません」というたとえには表されているのです。

やがて世の終わりには史上最も過酷な、大きな患難が彼らイスラエルを待ち受けています。その絶望的な「暗闇」の中で、また「奥の部屋」これはヘデル(הֶדֶל)と言い「泣くための、嘆きの部屋」という意味(創 43:30)で、そのような苦しみの中で主を呼び求め、これに嘆きをもって語りかけた言葉、祈りが「明るみ」すなわちその光の根源である主に聞かれ、「屋上」という意味のガーグ(גָּג)これは本来、幕屋の聖所にある金の香壇(出 30:3)を指す言葉で主の御前に立ち上る祈りを意味する言葉です。そのような聖所での正式な祈りとして神に聞き入れられ、聞き届けられるということが「あなたがたが暗闇で言ったことが、みな明るみで聞かれ、奥の部屋で耳にささやいたことが、屋上で言い広められるのです」というたとえには秘められており、そこには大患難の中でまことのメシアである主イエシュアを呼び求めるようになるイスラエルの残りの者の姿が、そのような神のご計画が表されているのです。このように、上記のたとえは「真実はやがて明らかになる」というような万事における抽象的な一般論を言っているのではなく、

やがてイスラエルの民、イスラエルの残りの者がその苦しみの中で主の御名、イエシュアの御名、シエーム・イエシュアと呼び求めるようになるということが指し示されているのです。

## 2. 友

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:4 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。

12:5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。

イエシュアはここでは「友」に対して語っておられます。イエシュアはこの「友」という呼び方、そのような存在について特別な意味を持っておられます。

ヨハネの福音書【新改訳 2017】

15:15 わたしはもう、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべなら主人が何をするのか知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。父から聞いたことをすべて、あなたがたには知らせたからです。

このように、「友」とはしもべのように「主人が何をするのか知らない」つまり神である主のご計画を知らない者ではなく「すべて…知ら」された者という意味です。ですからここでイエシュアが語っておられることは何の秘密もなぞかけもたとえもありません。つまり「殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方」このような御方こそが私たちが恐れるべき主であると明言、宣言しておられるのです。そしてその御方がやがて以下の預言をすべて成就されます。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

19:19 また私は、獣と地の王たちとその軍勢が集まって、馬に乗る方とその軍勢に戦いを挑むのを見た。

19:20 しかし、獣は捕らえられた。また、獣の前でしるしを行い、それによって獣の刻印を受けた者たちと、獣の像を拝む者たちを惑わした偽預言者も、獣とともに捕らえられた。この両者は生きたまま、硫黄の燃える火の池に投げ込まれた。

20:10 彼らを惑わした悪魔は火と硫黄の池に投げ込まれた。そこには獣も偽預言者もいる。彼らは昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける。

20:14 それから、死とよみは火の池に投げ込まれた。これが、すなわち火の池が、第二の死である。

20:15 いのちの書に記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた。

このように私たちの主は、獣も偽預言者も悪魔も悪霊どもも、ついには死とよみをも「**ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方**」なのです。主イエシュアの権威がいかに強大、絶大なものであるか、まさに恐るべきものであるかを私たちは覚えなければなりません。

### 3. 一羽の雀でも

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:6 五羽の雀が、ニアサリオンで売られているではありませんか。そんな雀の一羽でも、神の御前で忘れられてはいません。

12:7 それどころか、あなたがたの髪の毛さえも、すべて数えられています。恐れることはありません。あなたがたは、多くの雀よりも価値があります。

「**五羽の雀が、ニアサリオンで**」というこのたとえはイエシュアの奇蹟の一つである「**五千人の給食**」に結び付けて解釈するならば「**五つのパンと二匹の魚**」にたとえられた神の御言葉、すなわち律法（トーラー）とも呼ばれるモーセ五書、ネビイームと呼ばれる預言書、ケトゥビームと呼ばれる諸書からなるタナフとも呼ばれる旧約聖書全体を指すものと考えられます。そう捉えるならば「**そんな雀の一羽でも、神の御前で忘れられてはいません**」というたとえは、以下のイエシュアの御言葉を指し示していると言えます。

マタイの福音書【新改訳 2017】

5:18 まことに、あなたがたに言います。天地が消え去るまで、律法の一点一画も決して消え去ることはありません。すべてが実現します。

このように、神のご計画とはすべて聖書に記された、その御言葉に秘められた事実を実現させているものであり、それらは「**すべてが実現します**」ということがここにはたとえられており、それが「**五羽の雀が、ニアサリオン…そんな雀の一羽でも、神の御前で忘れられてはいません**。」というたとえには表されているのです。

また「**それどころか、あなたがたの髪の毛さえも、すべて数えられています**」ともありますが、「**髪の毛**」はセーアール(שער)と言い、本来はヤコブすなわちイスラエルに長子の権利を売ったエドム人の祖エサウ（創世記 25:25）を指し示す言葉です。つまりアブラハムの子孫であるイスラエルだけでなく、イスラエルにつながる異邦人もまた選びの民として主に「**すべて数えられて**」いる、覚えられているということなのです。ですからそのような者たちは「**ゲヘナに投げ込**」まれることを「**恐れることはありません**」。「**あなたがたは、多くの雀**」つまり聖書に記された御言葉において、そこに指し示された神のご計画によってあなたがたもまた主の目には尊く「**価値があります**」ということがここにはたとえられているのです。

### 4. 認める

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:8 あなたがたに言います。だれでも人々の前でわたしを認めるなら、人の子もまた、神の御使いたちの前でその人を認めます。

12:9 しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、神の御使いたちの前で知らないと言われます。

ここで「認める」と訳されているヘブル語はヤーダ(יָדָה)は本来「ほめたたえる」という意味の言葉です(創 29:35)。そしてこの御言葉の表現は「御使いたち」が登場しているのでこの地上の出来事ではなく、天上の出来事を表しており、それは以下の預言を指し示していると考えられます。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:9 その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。

7:10 彼らは大声で叫んだ。「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。」

7:11 御使いたちはみな、御座と長老たちと四つの生き物の周りに立っていたが、御座の前にひれ伏し、神を礼拝して言った。

7:12 「アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが、私たちの神に世々限りなくあるように。アーメン。」

これは 144000 人のイスラエルの残りの者につながって救われ、大きな患難を経て天に上げられた「すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆」についての描写ですが、まさに彼らは人には「数えきれない」、しかし主には「すべて数えられて」覚えられている、まさに「髪の毛」にたとえられた存在です。彼らはまさに「人の子」と「神の御使いたちの前」でヤーダ、主を「ほめたたえる」のです。そして神ご計画の時系列においてここに数えられない異邦人は「神の国」には入れません。当然それはイエシュアを否定、信じない、知らないと言う者であり、結果イエシュアから「神の御使いたちの前で知らないと言われ」る者となるのです。

このように、神のご計画はイスラエルを中心としつつも、異邦人、すべての国々の民すなわち人類全体に及んでおり、それらはすべて聖書に記された、正確には聖書の原語でありイスラエルの言語であるヘブル語のその本来の意味に秘められた「神の国の奥義」に従って成就します。そしてそれを成し遂げられる御方は神の御子、イスラエルの王なるメシアであられる主イエシュア、ただお一人です。ただこの御方に権威があり、神のご計画を御言葉のままに完了、完成させる力があります。この御方の前では獣も悪魔も死もよみも全くの無力です。その偉大さを覚え、私たちはこの御方にのみ目をとめ、その御名を呼び求めようではありませんか。